



季節を知ったら
暮らしが楽しくなった

〜第四十二号〜

白露 はくろ

九月七日



秋の月

お盆過ぎの八月十七日の未明、約一年ぶりの月食があるというので、五時前に西の空を仰ぎました。紫色の美しい夜明けの空が広がっていました。残念ながら月食は見えずじまいでした。

日食や月食のように、天文現象という「食」は、天体が食べられる、欠けていく現象です。日食は太陽が月によって直接隠される現象、月食は太陽に照らされた地球の後ろに伸びた影の中に月が入ってしまう現象です。いずれも太陽、地球、月が直接並んだ時に起こるものです。

昼間は残暑が厳しいですが、夜空に浮かぶ月はずい分と澄んできました。月は古来、時を計る指針とされてきました。新聞の天気予報欄にも毎日、月の満ち欠けと月齢を記しているのもその名残なのでしょう。新月から始まり、三日月、上弦じょうげんの月、十三夜じゅうさんや、十五夜満月いそよひ、十六夜、立ち待ち、下弦かげん、晦日みそひと月の暦である旧暦は約三十日で一カ月としてきました。その呼び名には単なる数値ではなく、月をこよなく愛でた日本人の詩情が伺えます。

五十鈴川畔にある五十鈴茶屋五十鈴川店の野遊び棚の天辺には時計檣が据え付けられています。そこには月の形が浮かび上がる珍しい月時計がありました。今日はどんな月か、毎日変わる月の満ち欠けが一目でわかります。白露の今日は、左半分が欠けている上弦の月。そして満月は中秋の名月で、十四日になります。月食は必ず、満月に起こります。次回は再来年の二〇一〇年の一月一日未明に部分月食が、同年の十二月二十一日に皆既月食と予想されています。美しい月を眺めながら、改めて科学は日進月歩に進んでいることを思ったのでした。

文 千種清美

